

会 議 録				
平成 20 年度第 2 回 社会教育委員の会議	日 時	平成 20 年 5 月 23 日 (金) 午後 9 時 30 分～11 時 30 分	場 所	小金井市役所第二庁舎 801 会議室
事務局	小金井市教育委員会生涯学習課			
出 席 者	委 員	伊藤、浦野、倉持、小林、田尻、田中、彦坂、本川 各委員 (欠席) 井土、武田各委員		
	その他	渡辺生涯学習部長、尾崎生涯学習課長、林スポーツ振興課長、田中図書館長、中嶋公民館長		
	事務局	木村生涯学習係主事、		
傍聴の可否	◎可 ・ 一部不可 ・ 不可		傍聴者数	0 人
傍聴不可・一部不可の場合の理由				
次 第				
<p>1. 報告事項</p> <p>(1) 平成 20 年度社会教育関係団体への補助金交付について</p> <p>(2) 平成 19 年度放課後子ども教室の報告について</p> <p>(3) 第 13 回東京国際スリーデーマーチの報告について</p> <p>(4) その他</p> <p>2. 協議事項</p> <p>(1) 平成 20 年度放課後子どもプラン運営委員の推薦について</p> <p>(2) 平成 20 年度第 5 ブロック研修会について</p> <p>(3) その他</p>				
<p>1. 報告事項</p> <p>(1) 平成 20 年度社会教育関係団体への補助金交付について (尾崎生涯学習課長)</p> <p>申請団体は 21 団体、申請額が合計で 48 万円。補助金の交付決定は、小金井市社会教育関係団体補助金交付要綱第 8 条に、社会教育委員の会議の意見を聞いた上で補助金の交付の決定をするものとされているので、意見があれば伺いたい。 (浦野委員)</p> <p>毎年、PTA 連合会でも補助金をいただいているが、この表にはない。 (尾崎生涯学習課長)</p> <p>これは、あくまでも社会教育団体の中で申請があり、交付しているもの。PTA 連合会は、既に予算化されているので、また別項目になる。 (田中議長)</p> <p>新たに出た団体はどのくらいあるのか。また、過去の申請団体の傾向は。 (尾崎生涯学習課長)</p>				

20年度で初めて申請があったところが1団体。21番の団体である。

交付回数であるが、今年度は、1番から14番の団体までが5回目ということになるため、補助金自体は20年度をもって終了。15から19までの団体が4回目なので、20番の団体が3回目、一番下が1回目の申請。

(2) 平成19年度放課後子ども教室の報告について

(尾崎生涯学習課長)

放課後子どもプラン運営委員会委員数は20名、6回開催した。小学校区別内訳は、第一小学校から南小学校まで9校すべての学校で事業を実施した。年間実施回数は、平日が524回、土日が32回、合計で556回開催。年間の参加延べ人数は、合計で1万8,715人。放課後子ども教室別内訳は、教室数は12教室。

(伊藤委員)

放課後子ども教室は、特別教室や空き教室等を利用して校内で実施しているのか。

(尾崎生涯学習課長)

基本的には校内の空き教室等を利用しているが、児童館等、ほかの場所を利用している場合もある。

(伊藤委員)

場合によっては材料費がかかるが、消耗品等については子どもたちが各自持ち込みということになるのか。

(尾崎生涯学習課長)

予算で消耗品を計上しているので、消耗品等はそちらから出ている。内容によっては材料費等の実費で多少の金額を集めることもある。

(浦野委員)

19年度、モデルケースとして本町小学校の放課後子ども教室が挙げられたが、その内容・実績について報告いただければと思う。

(尾崎生涯学習課長)

毎週金曜日、基本的には3時半から5時半まで、読み聞かせや工作教室というようなものを行った。昨年度は定期的な形で開催できた。

(田中議長)

放課後子ども教室が、地域や小学校によって、回数にばらつきがある。実施の回数の差は何か。

(尾崎生涯学習課長)

学校によっては、以前から保護者や地域の団体等を中心に活動をしているところがある。これまで継続的に実施してきたものが、放課後子ども教室事業として実施されていくところもあり、そういった定期的な活動がある学校は回数が多い。そうではないところはなかなか継続的な部分が難しいところもあり、若干の差が出ている。

(浦野委員)

従来からPTAの活動として事業を行っていた一小や三小については、校庭開放授業等も充実し、スムーズに行われている。前原小は読み聞かせの事業を行っており、回数は少ないけれども、とても歴史のある充実した事業をしている。これは主にPTAが中心になって活動なさっているものなので、ばらつきはいたし方ない気がする。

(3) 第13回東京国際スリーデーマーチの報告について

(林スポーツ振興課長)

第13回東京国際スリーデーマーチは、5月3、4、5の3日間の日程で開催した。参加人数は、総合計で2万6,088人、前年より3万2,995人の減。中学生ボランティアは、各中学校に協力いただき、全市立中学校から3日間、延べ人数で223人の参加があった。高校生のボランティアは、3日間の延べ人数で10人。ボランティアの内容は、スタート、ゴールでのチェックカードへのスタンプ押し等で、大変熱心に協力してもらった。武蔵小金井駅、東小金井駅などでの参加者の会場案内は、市内の各スポーツ等の団体の協力を得て、3日間で合計39人に参加いただいた。また、今年は、参加者へ配布する物品の封入ボランティアを、スリーデーマーチの無料参加を条件に募集した。申し込まれた47人の方で封入作業を行っていただいた。苦情等については、参加者が道をふさぐ、歩道をふさぐといったようなものが多く、関係者と協議しながら、改善に努めていきたい。

(田中議長)

予算について、ウォーキング協会のほうから報告はあるか。

(林スポーツ振興課長)

実績の報告は大会終了後60日以内に出していただく。7月の頭までには報告が来るので、また資料として提出したい。

(小林委員)

中学生、高校生のボランティアには、今後また継続したいとか、何かしてみたいとか、アンケートを集計したか。

(林スポーツ振興課長)

特にそういったアンケート調査はしていない。

(田尻委員)

中学生の社会貢献ということで、教育委員会と学校が力を入れているが、昨年と比べ参加の人数はどのくらい増えているのか、中学生が担当したボランティアの内容どういったものかを教えて欲しい。

(林スポーツ振興課長)

昨年は実数で75人程度、参加いただいた。今年は、実数で174人なので100人程度増えている。ボランティアの内容は、コース別の出発式の受付、スタートの際のカードチェック、コースの先導、ゴールのチェック、参加者への飲み物等の配布、声かけ等をしていただいた。午後は時間にかかわらず参加者が帰ってくるので、午

後のほうが忙しいかもしれない。

(彦坂委員)

延べ2万6,000人の方々の、市内の方と外部の内訳は。

(林スポーツ振興課長)

まだ情報が入ってきていないので、届いたら、次回報告したい。

(本川委員)

昨年比3万2,995人の減の理由は何か。

(林スポーツ振興課長)

昨年は5万8,000人、一昨年は5万9,000人、今年は約2万6,000人で半減以上だが、天気が影響し、特に初日、5月3日が雨天であったことが主な原因と考えられる。前もって申し込まれている方、特に遠方から来る方は雨天でも参加するが、日帰りや比較的近い参加者は、天気が悪いと参加しない。大会に表彰制度というのがあり、3日間参加すると表彰の対象になるので、それを目標に参加する方については、1日目に天気が悪く参加しないと、2日目、3日目も参加しないことになる方が多いかと考えている。

(本川委員)

2万6,000人というは実数ではなく、延べ人数か。

(林スポーツ振興課長)

2万6,000人というのは3日間の延べ人数。参加については、参加費は当日大人2,000円で、1日でも3日とも参加しても同じ金額なので、3日間歩かれている方も相当数いると思う。

(渡辺生涯学習部長)

「スリーデーマーチ」の「スリー」は、3日間歩くというのがこの大会のテーマであり、3日間歩き通すという目標に向かって参加するので、初日が雨になると翌日、翌々日が天気でも、参加人数は大幅に下がる傾向がある。

(田尻委員)

中学生のボランティア活動に対する参加者の反応、評判、それとともに、中学生本人がどのような感想を持ったのか、わかる範囲で教えて欲しい。

(林スポーツ振興課長)

みずから手を挙げて参加した中学生ボランティアなので、本当に進んでいろいろなことをやってくれている。楽しみなながら貴重な経験をしていただいているように感じている。一度参加すると続けて参加してくれるという方がかなりいる。また今年も来てくれたなというような生徒がたくさんいるのを見るとうれしく思う。

(渡辺生涯学習部長)

当日8時半前後に集まっただき、会場の舞台の上で、中学生・高校生のボランティア全員に舞台に上がってもらい紹介をする。その後、最初のスタート地点でのボランティア活動が始まる。また、午後に来る生徒もいるので、午後は午後で時間がと

れば、もう一回紹介をしている。最後まで3時半頃、全員に舞台へ上がってもらい、今日ボランティアをしてもらいましたという紹介をしたうえで解散になる。主催者側からは、「大変よく働いていただいた」という声を聞いている。2日目、3日目は、かなり暑くなり、飲料水の給付では、テントに山のように積んであった飲料水を開封し、運び出すという力仕事もやっていただいたと聞いている。

(田中議長)

ぜひボランティアの方の声を、簡単でもいいから書いてもらって、どこかポストに入れておいてもらえれば次の機会につながるのではないかと思う。どこの中学校から来たとか何年生というのがわかればよい。

(渡辺部長)

当日の現場は、それぞれのほうに散らばってしまい、最終的に全員が集まるのは解散のときぐらい。食事をしてから帰るとか、ばらばらに動くということがあり、出欠をとるのが精いっぱいな部分がある。参加校については、事前に参加の紙を出していただくので、傾向は十分つかめるが、やはり現場に近い学校のほうが多い。参加者の声は紙を渡してという形だと、なかなか書きづらいところがあると思う。私たちは現場にいるので、それぞれの中学生に直接聞いてみたい。

(田中議長)

そんなに大層なものじゃなく、何でもいいから書いて入れるとかでよい。あまり形式張らないほうがよい。

(本川委員)

参加者の声について、科学の祭典のときの参考だが、後で学校のほうにお願いして出していただき、それを報告書に掲載した。中学生ボランティアに対して、お昼等はどうなっているのか。

(林スポーツ振興課長)

昼食は支給した。それから、ボランティアをやっていただくに当たって、大会の帽子も一人ずつ差し上げている。飲み物については、スポンサー関係から飲み物が支給されるので、随時それを飲んでいただいている。

(4) その他

(尾崎生涯学習課長)

第1回の会議で要望があった、社会教育関係団体の一覧表を出した。平成20年5月現在、登録数は102団体である。1団体取り消しがある。表には団体名、目的、会員数を載せているので、ごらんいただきたい。

(田尻委員)

小中学校のPTA連合会と東小学校PTAとあるが、これはどういうことなのか。

(尾崎生涯学習課長)

次回までに詳しい経緯を調べ報告する。

(渡辺生涯学習部長)

小金井市社会教育団体登録要綱に基づいて登録をしている。第2条に基準が定められており、公の支配に属さない団体であること、継続的・計画的に社会教育に関する事業を行うことを主たる目的とし、事業の成果が期待できる団体であること、団体の組織及び運営に関し、要件を備え、団体構成員が10人以上であること等の要件を満たしていれば、登録としては有効。判定が困難なものについては、社会教育委員の会議に意見を聞いた上で決定するという事になっている。

2 協議事項

(1) 平成20年度放課後子どもプラン運営委員の推薦について

(田中議長)

平成20年度放課後子どもプラン事業にかかわる運営委員の推薦について、文書が来ている。推薦人数は1人。任期は、委嘱または任命された日の属する年度の末までの約1年。委員会の開催数は年6回。報酬は1回1万円。19年度までは武田委員がこの委員を兼任していたが、どなたか、子ども放課後プランの運営委員をしてもいいという方はおられるか。小林さん、どうか。

(小林委員)

何もわからないが、よろしく願います。

[平成20年度放課後子どもプラン運営委員は小林委員に決定した。]

(2) 第5ブロック研修会について

(田中議長)

資料4の私の案だが、内容はシンポジウム形式にして、テーマはネットワークをどうやって構築するか。～世代を越えて文化・情操を高めあうまちづくり～ということだが、世代を越えてということはどうやって横と結びつけていくかということだ。どのように情報を共有していくのかということを中心に考えた。小さな地域の人たちをシンポジストとして招いて、話をさせていただく。大切なことは、ただ自分たちのやっていることを話してもしょうがないので、どういうふうにしたら欲しい情報と欲しい人を見つけられるかということをお話し合えるとよい。ここにこのような情報があるとわかりやすいということをお提案していただければ。小さな小学校区等の中での活動を見ながら、一般化して話ができればよい。後半は、各市の社会教育委員の皆さんが、うちはこんなことをやっているとか、こういう方法もあるのではないかとといった話し合いができれば。会場については、博物館の運営委員会のほうに問い合わせたところ、使って構わないとの返答をもらった。博物館の案内もやってくれるので、研修会が終わった後、大学の博物館を見学することも可能であるという返事をいただいている。

(伊藤委員)

私の案は、テーマとしてネットワークの構築というのを出したが、これはもう少し

オブラートをかけたほうがいいかもしれない。社会教育関係団体102団体がそれぞれ社会教育活動をし、素晴らしい業績を上げているにもかかわらず、あまり広く知れ渡っていないのもったいない。全体が知ることにより、地域そのものも活性化してくる。ただ、地域とは何かという回答が見つかっていないが、そのあたりも切り口とすると、ネットワーク構築ができ上がっていくかと思う。

(本川委員)

生き生きと学び地域に貢献する社会教育という観点から、小金井というのは何をしてきたかというようなことを少しでも皆様に理解いただければと思い、この資料を出した。ネットワークづくりの端っこに取りかかったのかなというようなところである。これからどんどん広がっていくだろうし、もっと密になっていくだろう。今は出発したところなので、これからどういう方向に行ったらいいのかというのも参考にしてもらえれば。人とのつながりやそれまでの経緯というのはとても大事なことで、核になるところがないと難しい。

(小林委員)

地域、学校、公共施設等を考えたとき、今、学校支援地域本部事業というのも考えられている点含め、考えてみた。浦野委員、彦坂委員、本川委員も、既に子どもたちとのかかわりがあると、日ごろからの活動の様子を聞いていたので、社会教育委員の中からもパネリストに登場していただくこともできるのではないかな。また、放課後子どもプランのコーディネーターや公民館の企画実行委員の制度、防犯パトロール隊等があるので、こういった方々の登場もよい。司会進行については、倉持先生は社会教育の専門なので、上手に進めていただけるのではないかな。地域全体で学校を支え、子どもたちを守っていくにはどのように取り組んでいったらいいのかな、地域は多様な人材宝庫で、団塊の世代、さまざまな仕事や特技を持つ方、既にボランティア活動をやっている方もいる。既に活躍の舞台が市内各地にあるので、学校区域を絞らなくてもできるのではないかな。パネリスト活動内容を話してもらい、そこから問題点や今後どのように支援の中で連携がとれるかまで視野に入れた各市内のネットワークが、全地域につながっていくきっかけになればよい。

(浦野委員)

世代を越えてということで、子どもの活動を通して、子どもの活動を支える大人が輝ける、生き生きとした生涯教育・社会教育活動が相互作用としてできるのではないかな。地域で子どもを育てる観点から、子ども会の活動、また小金井市の市子連、スポーツ団体の活動なども挙げられる。学校と地域との連携ということで、校外的には、「カンガルーポケットの家」（子どもが何かあったときに飛び込める家）を知るファミリースタンプラリーの運営等にも、PTAと民生委員が連携することができた。校内では、放課後子どもプランも地域との連携の部分も大きい。ただ、この事業については、一小は、どちらかといえば今までどおりの校庭開放がメインなので、もっと先進的な三小、あるいは19年度のモデル校をなさった本町小のほうが、より、今必要な

放課後子どもプランについて話が聞けるだろう。一小では、平成15年度から、一小地域連絡会という会合を年に2回ほどやっている。町会や子ども会、スポーツ団体、ボーイスカウト等、多くの方が集まってくるが、それぞれの活動を大事にするあまり、次のステップになかなか結びつかないのが現実で、情報交換だけで終わってしまう。今回、このシンポジウムによって、次のステップはこんなことを目指しているんだというのが理解できるような場となれば、社会教育委員だけでなく、地元で活躍しているいろいろな方をパネリストにお呼びし、理解を深め、前進につながっていくのではないか。

(田尻委員)

どの学校も、基本的な考え方は「地域の中の学校、地域あつての学校、子どもあつての学校」という形で経営方針を立てながら進めている。子どもの健やかな成長は我々大人の共通の願いであり、子どもの笑顔は地域・社会の宝であるので、これをどういうふうにはぐくんでいくか。しかし、現状はまだまだ教育課題、教育問題が山積している。今は学校だけで子どもたちを育てていくというのは難しい。学校だけでは子どもを育てることはできないので、保護者・地域・行政関係と学校が、それぞれ知恵を絞り、それぞれの場でできることをやり、できるだけ多くの大人の目で子どもたちをはぐくんでいくことが求められている。そのための取り組みとして、学校支援ボランティアの拡充が挙げられる。大事なのは、子どもたちがボランティアの方々と子どもとのかかわりを通して人間的な部分で成長すること。人間関係が希薄と言われている中では、非常に大事。かかわりの中でいろいろな言葉が交わせ、その中で認めてもらうことや励ましに対しての喜び・感謝も出てくる。大人とのコミュニケーションを通して、人としての生き方、考え方といったことも触発される。昨年度の学校支援ボランティアは述べ1,000名を超えた。子どもたちの学習意欲、授業内容の質を高めることができ、専門性の高い学習を子どもは望んでいるので非常に意欲的になる。いつも担任と子どもの関係だが、そこに全く新しいかかわりが出てくることで、子どもが非常に素直になるし、高齢者の方等は元気をもらったと言って帰る。その後、地域で道を歩いている中で、互いに声かけをしてかかわりが深まっていく。学校の中だけでなく、校外でもかかわりが少しずつ広がっている。この中で、人・地域と子どもを結びつけるコーディネーターが必要になってくる。また、小金井市の特徴として中学生の社会貢献も挙げられる。ごみ問題や地域防災、スリーデーマーチ、サイエンス・ライブショー等へも中学生がかかわっている。健全育成の6地区の行事へも中学生が参加し、地域の一員として活動しており、中学生の活躍・社会貢献というのは特徴的だ。

(田中議長)

ネットワークをうまく使い、地域の持っている力を、学校から地域に、地域から学校に、あるいは違う団体にうまく力が伝わるような仕組みをつくりたい、情報を得たいということがある。これをブロック研修会の中で、方向性を見出しながらやっていけるとよい。

(彦坂委員)

ネットワークづくりが私らの課題だ。「きらめきの生涯へ、学びの縦糸に思いやりの心で紡ぐまちづくり」というような、側面的な、サブタイトルを付けてはどうか。で横糸は思いやりじゃないかなと考えた。これが入らないと、ただ組織だけあったって、魂入れずではないし、ネットワークづくりというのは心を入れることだなど。それで一つの小金井が見えてくる。今回冊子を作ってはどうか。あらゆる多様性のある社会教育関係の1冊ができれば、それが文教都市小金井の象徴になる。

(田中議長)

実際のブロック会議の中で出たことが一つの方向性を持って、行政や市民の方に広がっていくようになっていければいい。

(倉持委員)

皆さんの関心のポイントが、子どもとか青少年というところにあるということが見えてきた。今、社会教育の新しい役割として、教育基本法でも学校、家庭、地域での連携ということが言われ、社会教育法の改正案の中でも、社会教育は社会教育主事の役割として、学校の求めに応じて指導、助言を与えるという点が新しく入った。社会教育の存在意義が難しくなっているところがあり、学校を支援するということが大きな役割になってきている中で、子どもや青少年に対する地域の支援を取り上げることは、現代的なテーマで意義がある。一方で、社会教育は学校のためにあるのではなく、市民の学びや大人の学びを支援する役割があるという批判もある。そのような中で、学校外の子どもの学習支援を通して、大人もともに学び、活動している大人にとっても、意義やメリットがある。内容的には大きなテーマになりそうなので、あまり欲張ると崩壊する可能性もある。

(田中議長)

サブテーマとしては、ネットワークをどのように構築していくかだ。他市の方もいろいろな意見を持っているし、既にやっていることもあるかもしれない。6月ぐらいに大体の案をつくり、7～10月辺りで他市とも話ができるのではないかな。

以上